

爆乳熟女戦士が
流浪の童貞剣士を
筆おろし！



うさぎロボ 著

1章 爆乳「お姉さん」のお礼はパイズリ+アルファ（本番）

街道近くの森の中。

身を隠すのにちょうどいい辺り。

二つの石に、男女が腰掛けていた。



その片方、変わった鎧の年上の女がちょっと一緒に出かけようか、というぐらいの調子で言う。

「そうだ、お礼はパイズリでどう？」

思わず、水を噴出す男。かなり整った顔立ちで、顔だけなら女に間違われるかもしれない。

「パイズリよ！ 結構上手いのよ、お姉さん」

「お姉さん、アマゾネスですよね？」

「やだ、若いお姉さんだなんて……」

ポ、と顔を赤らめる熟女。

と言っても、まあ三十前後だ。

若い、と言えは若い。

一方で、AVなどでは25歳から熟女と言われるので十分熟女ではある。

まあファンタジー世界にAVなどないが。

不死鳥帝国と七都市連合共和国の間、そろそろ戦になるかも知れないといわれている一帯。

その街道に馬車がひっくり返り、周辺に傭兵らしい人間たちとゴブリンが相当数倒れていた。

人間は傭兵が八人ほど、商人らしい男が二人で十人ほどで、ゴブリンたちは五十体ほどはいた。

ゴブリンとは小鬼のような妖魔で、まあザコというしかない。

訓練していない農民でも一対一で勝てる程度だ。

ただ、農民らは怪我したくないので安い金で冒険者を雇ったりするのだが。

そんなゴブリンでも、大量に現れれば強敵で、十人の人間は皆殺しとなった。

いや、皆殺しではない、十一人いて、一人だけ生き残っている。

その生き残りが、少し離れた所で一息ついていた。

一人で切り抜けたわけではない。

残り一人となり、いよいよ最後かと思った所で通りがかりの剣士が助太刀に入ってくれた。

それが恐るべき手練で、残り二十体ほどのゴブリンをほとんど一人で切り倒した。

それが、まだ二十にならない青年なのだから生き残りはおどろいた。

驚きつつも、まだゴブリンの援軍がいるかもしれないので、二人で森の横に隠れたわけだ。

しばらく待ったが、敵が現れる様子はない。

普通、ゴブリンはそんな何百もの群れを持たない。

ある程度数が増えれば餌を確保できない固体たちが固まって群れを出て行く。

餌が豊富で敵がいない場所なら相当な数になるだろうが、そういう場所はまあない。

「アマゾネスは、そんな簡単に男に手を出したりしないんじゃない」

「私はそういうのに合わないからでてきたの。戦に巻き込まれないでよかったわ」

今の大陸にある七大勢力の内一つがアマゾネスの部族だ。

といっても、部族が一万、彼女らに国を滅ぼされて直轄支配されている人間が百万、従属しているのが三百万、というような形だ。

非常に危うい、バランスが悪い構造だ。

いくらなんでも一万人で四百万人を支配するなど。

しかも、ろくに政治など出来ない力だけで。

そういうアマゾネスたちであるから、皆強張った顔でいつも怒っているような感じを、青年は想像していた。

しかし目の前の女は、むしろいつもニコニコしていそうな感じだ。

一緒にいると、若い女などよりほっとする。

青年、ラジャノは童貞である。

若い女と付き合うのは、なんというかハードルを挙げられそうで苦手だった。

苦手というか、付き合ったことはないが。

何か気後れする。

その点、目の前の女は要求めいたことも言いそうにないし、失敗しても責めたり失望もしないかもしれない。

かなり男に慣れている感じだし。

気づかれないように、胸元を見る。

かなり動きやすい、胸や腰を大体守るだけの鎧を着ている。

いわゆるビキニアーマーだ。

その胸は頭ほどもある。

息をしているだけでブルブル揺れている。

反応しそうになり、必死で押さえる。

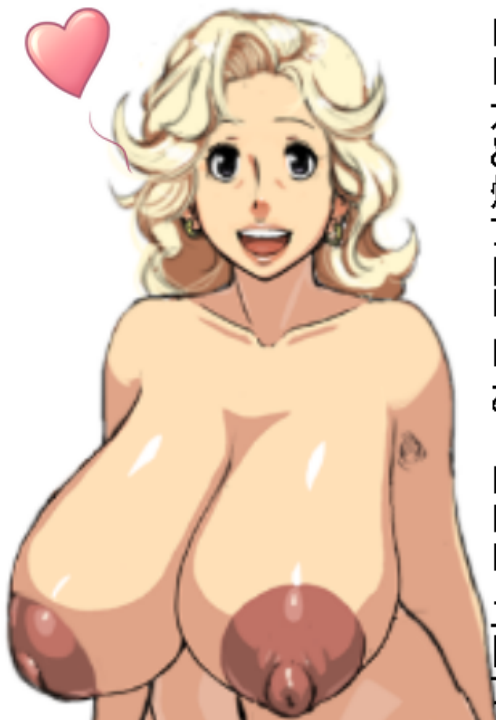
——あのオッパイでパイズリ？

想像しただけで夢心地だ。

しかし、助けたお礼にパイズリしてもらうというのはどうだろうか。

——卑怯じゃないか？ いや、要求したわけじゃないし……

「私、レフォティーっていうの」



「私、レフォティーっていうの」
「あ、俺はラジャノです。あっ」
カチャカチャ、と胸元、
というか上半身の鎧の留め金を外す
爆乳熟女戦士レフォティー。
ブルルン、と予想以上に巨大な
肉スイカがあらわになる。
「な、なにを……」
「うふふ、ジロジロ見てるから、
お礼のパイズリ受けてくれるんだと思って」

「いや、そんな」
「あら、じゃあオッパイ戻しましょうか」
「あ、それは……あっちよつと」
立ち上がるレフォティー。
巨大な下乳を見上げる。
ブルブル言わせながら、ラジャノの前にしゃがむ。

「あ、俺はラジャノです。あっ」

カチャカチャ、と胸元の留め金を外す爆乳熟女戦士レフォティー。

ブルルン、と予想以上に巨大な肉スイカがあらわになる。

「な、なにを……」

「うふふ、ジロジロ見てるから、お礼のパイズリ受けてくれるんだと思って」

「いや、そんな」

「あら、じゃあオッパイ戻しましょうか」

「あ、それは……あっちよつと」

立ち上がるレフォティー。

巨大な下乳を見上げる。

ブルブル言わせながら、ラジャノの前にしゃがむ。

「さー、こっちの剣は……」

「ああっ、まって」

言いながらも、下がりも立ちもしない。

石の上に座ったままだ。

ズボンの前が弄られる。

「うっ」

アッパー。

突然の奇襲にも、機敏に動くレフオティ。

突き上げられた拳。

突き上げられた拳。

いや、一物に目を見張る。

「あらまああ！ 顔は女の子みたいなのに……おチ○ポ大きいっ！」

「あ、いや、そんな……」

「立派よお、大きいわあ！ ほかの女の人はどういう反応を？」

「え、それはその……」

ほかの女に見せた事などなかった。
ただ、男同士で横目に見た限り、
自分のものが並外れて
大きいことを知ってはいた。



いや、一物に目を見張る。

「あらまああ！ 顔は女の子みたいなのに……おチ○ポ大きいっ！」

「あ、いや、そんな……」

「立派よお、大きいわあ！ ほかの女の人はどういう反応を？」

「え、それはその……」

ほかの女に見せた事などなかった。

ただ、男同士で横目に見た限り、自分のものが並外れて大きいことを知ってはいた。

その中途半端な、モジモジした態度にレフォティーは幼子が何か言おうとしているのを辛抱強く待つような優しい笑みを浮かべる。

——この子やっぱり童貞くんね。こんな大きい放っておくなんてこの子の周りの女子は……なんていい子たちなのかしら！ おかげで童貞デカチ○ポ私が食っちゃえるもんね！

「ラジャノ、さっきは本当にありがとう。君がこなかったら死んでたわ」

「そんな、偶然ですよ」

「若いのに大したものよ。おチンチ○も大きいし」

握る。体を強張らせるラジャノ。

指をピアノでも弾くようにうねらせる。

握ると言っても恐るべき太さで、大人の手でも指が回らない。

「お姉さん結構経験してきたけど、今までで一番大きいペ○スよ、これ。ふふ、ぶっちゃけ、普通の人の二本分の長さあるもん」

「ほ、本当ですか？」

「あら、嬉しそう」

「いや、別に大ききなんて……あふっ」

ズボリ、と手をズボンの前からつきいれ、ギュッと肉玉を握るレフォティー。そちらもとても平均的とはいええない大げさなサイズだった。

「おキ○タマも大きいのねえ。ニギニギしちゃう」

「うわ、そこは……」

「うふふ、男の急所。アマゾネスはね、話すより先にキ○タマの潰し方を習うのよ」

女戦士だけの部族。

ろくに農業もせず、周辺の治安維持をする代わりに穀物を取り立てる巨大な盗賊に等しい存在だった。

そんな集団が存続していくのは並大抵のことではないのだ。

「命のタマタマ……私に握らせておいていいの？」

「だ、だってレフォティーさんが何かするわけないし」

「まあ、それは……勘違いよ！ きゅきゅきゅっ」と

「あふあっ！」

膝を締めるが、レフォティーを挟み込むだけ。

背をそらし、頬を赤らめるラジャノ。

——かわいい反応ね。この子、かなりマゾッ気あるわ。

思いつつ、金揉みを続ける。

どのぐらいの力とリズムで揉んでやれば男が喜ぶか、レフォティーの指は熟知していた。

握りつつ、もう片方の手で巨根をシコシコとしごく。

「ああっ、や、やめて……出る」

「出してもいいのよ？」

——もう出ちゃうの？　なんて口に出せないわ。

手を離す。

巨根と巨球から。

「あっ」

「うふふ、これからがお礼よ」

両手を頭の後ろに回し、胸を張ってブルンと揺らす。

「おおっ」

「あは、このポーズ、男は皆大好きね」

ブルルン、と肩を使って爆乳を揺さぶる。

使い込んでいる割には相当ピンクに近い色の小指が二つ揺れる。

唾を飲むラジャノ。

「乳首大きいでしょ？　恥ずかしいわ」

「そんな、かわいいですよ」

「かわいって！　これより小さい男の人もいるのよ？」

「え？」

聞き返すラジャノ。

その反応に一瞬驚き、ついでこれ以上無いほど楽しげに頬を緩めるレフォティー。

「あらあ、「自分は巨根だから、これより小さいチンチ〇があるって言われてもすぐに理解できないよ」アピール？　「巨根ですよ」アピール？」

ちよんちよんと巨根を指でつつく。

石に座ったまま腰を引くような形だけするラジャノ。

「ちょ、そんなこと……別に、確かに俺は巨根ですけど、そういうことは」

「あらあら、認めちゃった。デッカイチ〇が自慢ですって」

「いってませんよ。あっ……」

「でも、どんな立派なおチンチ〇も、私の爆乳にはかなわない。埋もれちゃう……ああっ！　先っぽでてるわ！　ラジャノのおチ〇ポペ〇スすごい、超大きい！」

挟む前から、目の前に突き出されていたものがどうなるかはわかる。

なのに、あえて驚いてみせる。

男心がよく分かっているレフォティーだった、さすがの熟女である。

同年輩のものが数年前から次々経験していく中、一人取り残されていたラジャノ。

売春宿で済まそうかとも思ったが、踏ん切りがつかなかった。

男としての価値に自信が持てなかったが、爆乳に挟まれて巨根を褒められていると、どこからか誇らしい気持ちが出てくる。

と、ダラーリと涎を垂らすレフォティー。

自分のモノの上にモロに垂れてきてラジャノが気づくので、笑う。

「おチ〇ポがあんまり美味しそうだから、涎が出ちゃうわ」

もちろん、パイズリのための潤滑油だった。

爆乳の谷間は汗かきだが、それだけでスタートダッシュには足りない。

話しつつも、口の中で涎を貯めていたのだ。

手馴れた熟女、それも爆乳で、やる男全員にパイズリを求められ続けてきたパイズリの達人である。

「さあ、剣では勝てないけど、エッチ技なら勝てるわよお、お姉さんだものね。ほらほらほら」

「あ、あああっ！ お、オッパイいいっ」

「熱いわ、ラジャノのおち〇ポ、やけどしちゃう。早くへニャへニャにしないとね！」

シュシュシュ！ ブルブルブル！ 両側から何か巨大なパン生地でも捏ねるように爆乳を揉みあげる。素早くやるかと思うと、急に動きを緩くして左右から圧迫する。

「うふ、こうして押すとね……」

「お、押すと？」

「キ〇タマが押しつぶされて気持ちいいんだって。どう？」

「ああ、確かに金袋が柔らかいオッパイに押しつぶされてあったかいです」

「うふふ、ぎゅうう、ぎゅうううう」

「ああ」

「くらえ、パイズリ金潰し！」

「ああっ、キ〇タマ潰れるっ、勘弁して……」

潰れるわけが無い。

その安心と、急所への責めに目を瞑って喘ぐラジャノ。

爆乳の谷間で、ビクンビクンと巨根が膨れるのを感じる。

「うふふ、いいわねえ、童貞くんは」

「ち、違います、童貞じゃ……そんなに経験はないですけど」

「へえ、そうなんだ」

まったく信じていない。

しかも、仮に本当でも経験不足などほぼほぼ童貞ではないかとも思う。

思いつつ、パイズリ。

「そらそら、気持ちいいでしょ？ オッパイにおチンチ〇挟まれて幸せでしょ？ うふ、仮におマ〇コ無理矢理使っても、この幸せは手に入らないのよ」

「ああ、なんかわかります。満たされる感じ……」

「いい子ね」

チュ、と突き出ている巨柱に口付け。

「ああ、それは……」

フェラパイズリ可能な巨根。

しかし、レフォティーにはその気は無かった。

どちらもそれぞれに集中した方が気持ちよくさせられると思うからだ。

しゃがんでいたのを少し立ち上がり、パイズリのフィニッシュに入る。

「そらそら、ちょっと立ち上がったから、君の巨根も全部飲み込めるよ」

「ああっ、埋もれるっ」

「先っぽ気持ちいい？ 待たせてごめんね。おチ○ポ長すぎるから悪いのよ」

「ああっ、巨根ですいません……」

身もだえしながら、頬を緩めるラジャノ。

「こらっ、ただの巨根自慢でしょ！ そんなこという立派なおチ○ポにはお仕置き！」

「あああっ、ごめんなさい！ 巨根でごめんなさいっ！」

ブルルルルルル、激しく上下に揺れる爆乳。

ヌチュニチュヌチュと、涎や汗、巨根の先っぽから染み出した粘液が淫猥な音を奏でる。とても乳房がこすれあっている音ではない。

「巨チ○ポ巨チ○ポ！ 出しちゃいなさい！ 出して萎えちゃいなさい！ 出して普通になっちゃいなさい！」

「あああっ、でるでるっ、でも出しても大きいんです！」

「このデカチンチ○が！ 挟んでるだけで濡れちゃうじゃないの！」

ブルブルブル、ヌチュヌチュヌチュ、息を荒くして、レフォティーが狂ったように手を上下させる。あまりの快楽に腰が浮くラジャノだが、中途半端な姿勢なので下がれない。

「あああああっ！ ちょっとやめ……ああっ」

「おチ○ポいっちゃうって言いなさいよ！」

「そ、そんな女みたいな……」

「言わなきゃオッパイでキ○タマ潰す！」

相手をM体質と見て、しかし実際には実行できない方法を口にする甘々金責め。

それにビクッと体を強張らせ、しかしまったく嫌そうではないラジャノ。

完全に、レフォティーの見立て通りのようだった。

「うわああっ、お、お」

はあ、はあ、と何もしていないラジャノも、レフォティーに劣らない荒い息をつく。

お互い服を着たまましているのに、熱い、体温が上がる。

レフォティーは服を着ているといっても元から半裸に近いのでいいが、ラジャノは分厚い服にマント姿だ。

暑さと快楽で朦朧とし始める。

「ああっ、ああっ」

「キ○タマ上がってきたわ！ さあ言うのよ！ おチンチ○いっちゃうって！」

「そんな、恥ずかしい……ああっ、もうっ、あっ、そんな……」

パイズリの速度が急に落ちる。

「さあ、言っちゃいなさい。そしてイっちゃうのよ」

大好物が急に目の前から下げられ始めたように、顔をゆがめて動揺するラジャノ。

「あ、あ、下がる……下がるよ。今最高に気持ちよく……」

「ほらほら、ゆっくりしちゃうぞ。気持ちいい所ですすには？」

「ん……ああっ、お」

「お？」

「おチ○ポいっちゃう！ デッカイおチ○ポ爆乳パイズリでいかされるっ！」

「うふふ、やっぱり君はそっち寄りね」

顔だけ見れば女だと偽るようなラジャノを見上げつつ、レフォティーは最後の力で超高速パイズリを開始する。

「あああああっ、ちょやめ……金……つぶ……チ○が取れる……ああああああああっ！ 気持ちいい、気持ちいいっ！ おチ○ポいっちゃうううううううううう！」

「いきなさい！」

ドブ、本当にそんな音を立てて、勢いよく巨根が粘液を吹く。

口を吸い付け、粘液をすべて吸い取ろうとするレフォティー。

その姿に、さらにラジャノの快樂は跳ね上がり、大量の粘液が放出される。

——出しなさい、溜め込んだ童貞汁全部出すのよ！

喉を鳴らして粘液を飲みつつ、口の中にそれを溜め込み、吸い込んで貯めてはまた飲む。

狂ったようにすべて飲み干し、巨根の痙攣が止まってやっと一息つく。

痙攣が止まっても、まだ巨根はガチガチだった。

「若いっていいわあ」

涎や粘液が垂れる口を拭うレフォティーが立ち上がる。

安心して、呆然と石に座っているラジャノを見下ろす。

見下ろしながら服を脱いでいく。

「うふふ、まだそれ、使えるわよね。本当に若いっていいわね」

いってから、ふと何かに気づく。

「……まあ、私も若いけど」

若さに感心したら若くない、ということも無いだろう。

だがまあ、若さに感心するのはあまり若そうな態度でもない。

手を引っ張り、ラジャノを石から立たせる。

そして下を脱がせて、横の枯葉の上に寝かせた。

ビクンビクンと、巨根が天につき上がる。

それに跨る。

「ほんとに立派ねえ。ちょっと腰下ろしたらもう入っちゃうわ」

いいつつ、秘密の花園を広げる。

すでに大洪水といえるほど、蜜で溢れかえって巨根に垂れ落ちるほどだ。

花卉は大人びた濃い色で、しかし女の色気をそぐほどのこともない。

大人の女らしさが蜜と共に溢れるようだった。

自分の雌穴がどの辺りか、レフォティーははっきり把握している。

そのため、スムーズに挿入することが出来た。

「あっ！ す、すごい！ き、騎乗位だと普通の入れても気持ちいいんだもんね……こんなお宝なら、声も出るわ、おおっ」

「ああっ！ れ、レフォティー！」

気絶していたわけではないが、死ぬほど気持ちいい射精でほとんど意識がなかった。

それが戻ってきたとたん、女が上に乗っていれば驚くだろう。

それに、満面の笑顔を向けるレフォティー。

「おめでとうラジャノ。童貞卒業よ」

「あ、ああ……でも、いいの？」

「ん？」

「お礼はパイズリって……」

「細かい男ね。男性器はまったく細くないのに！ おおおおっ、奥まできたっ」

「うあっ、や、ヤバイ……」

キュ、と巨柱が引きあがる。

それは見えないが、男の体の強張り方から、もうでそうなのを感じ取る熟女。

「え、ちょ」

「ま、まだ大丈夫」

「よかった。……初めてにしちゃ、持つのね」

——って、初めてっていったって今出したばかりよ？ 早漏過ぎるでしょ。こりゃちょっと動けないわね。

「大きくて、すぐには動けないわ。ちょっと待ってね」

「もちろん待ちます」

ほっとした顔のラジャノ。

少し待って動き始める。

「ああ、気持ちいい……」

ズリズリと、巨豆といえる大きさの女の豆をラジャノの股間に擦り付ける。

ブルンブルン、肉スイカが揺れる。

プルプルと柔らかい尻肉が揺さぶられる。

猫のようにそった背中に汗が流れる。

「オッパイ触ってよ」

「あ、うん」

「ああっ、ラジャノの特大大おチンチ〇気持ちいい……私のオッパイどう？」

「柔らかくて温かくて……いいです、顔埋めたい」

「後でね、うふふ」

ゆっくり動くうちに、再び蜜が溢れてくる。

「んん、濡れるわ……」

「き、気持ちいいですっ、せ、セックスがこんなにいいなんて……」

「うふふ、私と一緒にいれば毎日できるよ？ しばらく一緒に旅しない？」

「いいんですか？」

「お願いしたいぐらいよ。君のおチ〇ポにはそれだけの価値があるわ。君のはね、巨根が普通に見えるぐらいのデカチ〇ポなのよ」

——かわいいわ。いいんですか？ だって。……こんな十個以上年上の女に。若くて強くて顔もいいし、チンチ〇も大きい子が……

「あっ、う、うねらせないで……」

器用に雌穴の締め付ける場所をずらしていき、同時に腰をずらすのもやめない。

「ああっ、で、でる、ちょっと待って……」

「うふふ、待たない」

「ええっ、じゃ、じゃあ出るから抜いて……」

「ダメ、ギリギリまで我慢して。限界までいったら、抜いてあげるからね」

「そ、そんな……」

「中出しはだめよ？ エッチ上手になるための第一歩、射精はコントロールするの」

もちろん、童貞にはとても無理なことはわかっていた。

——折角の童貞卒業だもんね、中に出させてあげたいわ。

「そらそら、がんばって、大きいおチンチ〇にふさわしい力を見せるのよ」

ブルブルンと肉スイカを揺らしながら、腰を八の字の動くように捻る。

「んふふ、それにしても本当、大きいチンチ〇は奥まで届くし、ゴリゴリ広げてきて気持ちいいわねえ、お姉さんもういきそうよ。童貞の癖に、チンチ〇だけでお姉さん楽しませてくれるなんて凄いわ」

「ああっ、そんなこといわれたら……」

「ん、ん、ん、いい感じよ、本当にこれ凄い……」

ゴリゴリと股間を擦り付ける。

蜜が垂れて、ラジャノを濡らす。

——うわ、凄い濡れてる。俺の、本当にそんなに気持ちいいのか。大きい方がチ〇ポっていいのか……じゃあ俺、凄くラッキーじゃないか。

「あっあっあっあっ、デッカイチンチ〇いいっ」

目を瞑り、背中を猫のように反らすレフォティー。

半分以上演技だ。

まずは自信をつけさせようという心遣い。

しかし、それははじめのうちだった。

「いいっ、いいわよお……すごいゴリゴリくるっ」

——ちょ、ちょっと……これ本当に凄いわ。

「ゴリゴリって……」

「んっんっんっんっんっんっんっんっんっ、いいっ、ちょっと、無理していい？」

「え、あっ」

ぺたっと腰の上に座っていたのが、尻を浮かせて中腰のような体勢になる。

「あは、この体勢でも、抜けるかもって一瞬も思わせないなんて本当に長いつて便利ねえ」

尻を下げる、上げる。ゆっくり始め、徐々に速度を上げていく。

「おほっ、おほっ、これいいっ！ このおチ〇ポいい！ お、男みたいにピストンできちゃうっ、気持ちいいっ！ 別物よ、普通のおチ〇ポとの騎乗位とは！ 長さは二倍でも気持ちよさは十倍以上よっ！」

「おほっ、おほっ、これいいっ！ このおチ○ポいい！
お、男みたいにピストンできちゃうっ、気持ちいいっ！
別物よ、普通のおチ○ポとの騎乗位とは！
長さは二倍でも気持ちよさは十倍以上よっ！」

大げさ、と思うラジャノ。
だが、腰の上でズボズボズボズボと
もう一心不乱に腰を上下してピストンしているレフォティーと見ると、
そんな疑いは吹っ飛ぶ。

——うわ、涎に鼻水……涙、顔から出せるモン全部出してんじゃん。
童貞として、女をイカせることを妄想したことは数多い。
しかしその最大限獣のように喜んでいる顔でさえも、
今体の上で一人の爆乳熟女が見せている顔にはまったく及ばない。

というか、**人間を越えて本当に
獣のように猛り狂いつつあった。**

大げさ、と思うラジャノ。

だが、腰の上でズボズボズボズボともう一心不乱に腰を上下してピストンしているレフォティーと見ると、そんな疑いは吹っ飛ぶ。

——うわ、涎に鼻水……涙、顔から出せるモン全部出してんじゃん。

童貞として、女をイカせることを妄想したことは数多い。

しかしその最大限獣のように喜んでいる顔でさえも、今体の上で一人の爆乳熟女が見せている顔に

はまったく及ばない。

というか、人間を越えて本当に獣のように猛り狂いつつあった。

「おごっ、おごっ、おごっ……デガチ○ボいいっ、じぬっ、じぬうううっ！」

入れたときには、すぐに行きそうだった。

しかし今は、想像よりはるかに気持ちいいものの、まだまだ持ちそうだった。

——目茶目茶気持ち良さそうだなこの人。嬉しいと言うより、引くほど……っていうか、ちょっとキ○タマ縮む。

が、常人の二倍の長さで並外れた巨肉根は貧血になりそうなほどピンピンだ。

ヌルヌルした熟女の雌穴は凶器にすら見えるラジャノの分身を平然と飲み込み、ブジュブジュジュボジュボと童貞だったころには想像もつかなかった生の営みの音を奏でる。

「おっおっおっおっおっおっおっおっ、ぐるっぐるっ、デッガイのぐるっ！」

腰をドンと落とし、また前後に振り始める。

女の悦びを知り尽くした熟女に迷いはない。

童貞相手だからという遠慮や、導こうと言う姿勢は吹っ飛び、ただ自分が楽しいから動く状態に陥っていた。

いや、上り詰めていた、か。

「レフォティー、いいよ」

前後に擦り、時々左右に腰を捻る。雌穴の中の気持ちいい場所に巨肉根が減り込むように自ら動く。

「おっおっおっおっおっおっおっおっお！ いいのおお！ ラジャノすごいのおおおっ！」

ほとんど寝ているだけのラジャノ。

それでも、その体を使って熟女は楽しんでくれる。

届く所に来たときだけ爆乳を揉む程度、柔らかく、触っていると幸せになれる。

それだけで、しっかりセックスしている気にさせてくれる。

——ああ、明日もやらせてくれるのか、レフォティーは。

それも、これだけ喜んでくれて。

「いぐっ、いぐっ！」

「よし、いけ！」

巨肉根を突き上げる。

「いぎっ！ イクイクイクイクっ！」

ギュウウウ、と強烈に巨肉根を締め付ける雌穴。

呻くラジャノ。そこで相手が女戦士の部族、アマゾネスだと思出す。

爆乳の下で結構肉のついた腹が見えるが、腹筋がないわけではないようだ。

締め付けの強烈さで、彼女の筋力に関心がいく。

その間にも、レフォティーはセックスに一心不乱だった。

もう大きな動きはせず、ただ腰を小刻みに前後させる。

それで巨大な女豆をラジャノの腰で磨り潰して粉にしようとする。

ゴリゴリゴリゴリゴリ、女豆と男根は似た要素があるとはいえ、自らのそれを容赦なく押しつぶす振る舞いは、やはり女豆と男根は根本的に違うと思わせる。

ゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリ、ヌジュヌジュヌジュ、女豆を磨り潰し、雌蜜のスープを作る音。

垂れる蜜で肉玉がべっとりしているのに頭の端で気づくラジャノ。

レフォティーが真っ赤な顔を顰め、腹の底から声を出す。

「んああっ！ もうだめっ！
セックス慣れてる年上なのにつ、
童貞巨大チ○ポにいかされちゃうっ！
初ハメチ○ポに負けるなんてっ！
もうだめ、だめっ！ ああっ、いく！

お、おっほおおおおおおっ！」

天国に駆け上るレフォティー。
その熟女のエロ過ぎる姿、
自分の一物を咥え込んで
一人の経験豊富な女が涙、鼻水、
涎にまみれて白目を剥く状況。
ラジャノはそここの年でありながら
童貞の人間として劣等感を持ってきた。
それが、レフォティーのブルンブルン揺れる
爆乳に払拭されるのを感じた。

ゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリ、ヌジュヌジュヌジュ、女豆を磨り潰し、雌蜜のスープを作る音。

垂れる蜜で肉玉がべっとりしているのに頭の端で気づくラジャノ。

レフォティーが真っ赤な顔を顰め、腹の底から声を出す。

「んああっ！ もうだめっ！ セックス慣れてる年上なのにつ、童貞巨大チ○ポにいかされちゃうっ！ 初ハメチ○ポに負けるなんてっ！ もうだめ、だめっ！ ああっ、いく！ お、おっほおおおおおおっ！」

天国に駆け上るレフォティー。

その熟女のエロ過ぎる姿、自分の一物を咥え込んで一人の経験豊富な女が涙、鼻水、涎にまみれて白目を剥く状況。

ラジャノはそここの年でありながら童貞の人間として劣等感を持ってきた。

それが、レフォティーのブルンブルン揺れる爆乳に払拭されるのを感じた。

——ここまで、セックス慣れた熟女ぶっ壊れるほどイカせる男がどれだけいる？

思いつつ、腰を動かす。

「ふんぐっ！」

絶頂でギチギチに締まった雌穴は、幸福感で満たされたラジャノの逸物をあつという間に昇天させる。レフォティーの狂ったような絶頂姿を目の前にした喜びも、素早い絶頂を助けた。

元々、童貞に耐えられる限界はとっくに突破していたのだ。

「で、でるっ！」

ドブ、ドブ、と雌穴に突っ込んでいる状態で、それでもラジャノには自分が粘液を大量に放出する響きが聞こえる気がした。

「おおおああっ！ ヤバイ、やばいってこのあ、ああっ！」

仰け反りつつ、脳が蕩けるような快感に身をゆだねる。

女のように声を上げないように、必死で押さえる。

「お、おチ○ポイツちゃう……」

それでも、小声で呟いてしまう。

言うと、さらに強烈な快感が襲い、大量の粘液が放出された。

体験版終わり

続きは製品版でお楽しみください

この後一旦水浴びをして覗きあい、
爆乳に震え、巨根を風車のように振り回すのに驚くなどのシーンの後、
童貞筆おろしの仕上げとなります